



祝叢大全

秋之部上





蕉翁發句說叢大全卷第四

葛飾 素丸 著述
全 南臺 檢校

秋部上

祢ぶのふれ葉ごしきいり星は氣

袋 云七夕の夜ふれを合歡のふれ葉ごしきいりふへと眠
らばるめとへと祢ぬのふれよせたり **解** 云新後拾遺集七夕の
葉と眠もいりて一眠のふれよせたりと合歡のふれよ

そよよき夕ア小き月ひ眠ふのよ〜かまは倍語祢むの本ともいへ
一夜の夢りなりゆも此景誠〜と〜也 **林** 此句を出る

説 **袋** 祢む〜と〜も〜と〜と祢ふの本ふや〜家六文

白り〜と〜祢ふ〜ぬふ〜も〜ら〜と〜も〜せり〜んり又二星

のあふ夜ハ眠ら〜と〜侍りの少や古説い〜と〜んる不か〜

倍語少をす〜と〜家子〜庚申の夜の思いた〜と〜少や **解**

引子合歡の言味よ叶〜と〜也此亦小限るる〜と〜也 ○

けらく〜句意と考ふる合歡アヨコビヲと讀む〜と〜也

よ合（ふ）の形容也並ハ〜と〜ぬや〜に〜歳を〜りて寸のゆも

ゆ〜翠簾と八重も〜つけたる〜と〜も〜の葉〜と〜も〜

い〜ひてま〜と〜せよ〜と〜せよ〜一夜の夢り〜る程〜と〜此方より

素魚〜と〜思ひと述〜る句也優美の風流を〜りて感〜

祢ふは縁治ハ皇合への優艶の〜り合せり〜と〜也 ○格物記

曰夜合一名合歡亦名合昏按圖經安和五藏和心志令入

歡樂云祢ふ〜と〜のこ〜と〜也や〜と〜也や〜と〜也

るの能あま〜と〜此か〜合の夜の〜と〜合せ〜と〜也

あ〜と〜い〜と〜か夫木抄九九兼 祢ぬの本 貞應二年百首

祢ふ高家 あき〜と〜い〜と〜か夫木抄九九兼 祢ぬの本 貞應二年百首

か〜と〜い〜と〜か夫木抄九九兼 祢ぬの本 貞應二年百首

か〜と〜い〜と〜か夫木抄九九兼 祢ぬの本 貞應二年百首

今葉の万葉集の合歌本海の巻もあつたのまゝとて
ふと六帖のこの言は出でたがうきと清り合歌本の巻も
うきと清りあつた此言の清りをつけて新撰の巻も
かゝりて歌あはれり新六帖のまゝの巻もついでに
その七の巻もあつた合歌本の巻

あさうほふ我の飯くまゝとて哉

解 云世々たる物魚の物かきよむとて物かきひ物をまゝとて
る麻もくもまれりつとてを観想の句も男とてまゝとて新撰の
あさうほふ一 袋林 此句を出さば

説 唯つづいたまゝとて送る。観想もまゝとて。又此句も
ハ男哉とつとて西女也。新撰の句も男とてまゝとて麻も
る。人情の今日も。何の缺もあつた。句解のつとて麻も
一。○ 予。あさうほふ。此句意ハ。新撰のまゝとての麻も
小我ハ斯く息也。筋骨も健もまゝとて食物もまゝとて
管も男也。まゝとての麻もあつた。一層の麻もあつた。此
と。まゝとての麻も。十成の俳諧也。活法尤もあつた。微妙の場也。
まゝとての麻も。世の人ハ。業もあつた。まゝとての麻も
まゝとての麻も。古人の麻もあつた。まゝとての麻も
ついでに人の尻馬もあつた。まゝとての麻もあつた。翁ハ却てまゝとて

人をしてせえ、作意凡例おらうぞ。さういへば、お魚のあがり、
たるのなりこそ見えぬ。——是と句外の餘情ともいふや。
後水尾院御製めも然うか、あそむか、ふするのてさうと
久しき死よとありらる。是憚るをたまふことあつたらうか。
まことたかりと見えぬ。——目出度うそとさけ
とこそ、名譽の事まは、お清くも。——お歌の中か、お活
達の場合を、況や、お清眸のさうりお生せ。——俳諧の
いふは、おふ悟ぬ人乃き、かたや

解

云々の、禅师の曰吾は、わたり、金せうと、思ふ心、茶一粒と、百分

と、わたり、金せうと、思ふ心、茶一粒と、百分の徒也
實く大悟する人の悟きり、證きりと、思ふ心、茶一
粒か——**袋林** 此句を、出さば

説

解

ハ句の解、よあは、悟心法の、夜話ともいふ。此句ハ、悟道
を、得りし句あは、と、梅書の、観想の、悟ぬ人の、思ふ心、
る句也、と、いふは、悟道の論ハ、校道ハ、蛇足と、添ふるともいふ。
解——、わりの、りよきハ、初葉の、年よ、いふ。——然れば、句解ハ、
思ふ心、らり。——**或書**、無名目
有三抽 ○或書ハ、
此句ハ、我の、見の、誠也、石火電光、是猶鈍、死の、火急、あらう、
と、大悟、今ハ、の、時、を、覺悟、して、力の、つら、な、り、

此振舞也衣よきやうにあつて風雅な言物
 東は後臂せん力のつりて真小正見とありて
 此の編書
 此のりく表めて淋しきことなき正直也たとて正見
 とくとも形取却せざるやといふ火宅のうき眼光落
 脱の真此正見とやいふん乃る自立ありて外より身は
 ありきと下略 此況をくくば句解の似たり然もも理
 論ありて句の深めた迂遠なるもの悟りよかりしに
 りねどあふの評のこころは悟り理不疑くさうに俳諧
 のまじりてやきん一層々面白くある句ありて予ハ
 此のゆりぬ○はくく揚ぐる此句の解の肯折らぬ

西のまじりて悟りなれ理屈理論のこと附會とるあふ一向
 句の正解なきさう也生死の大事ハ電光石火を待たん
 中
 小もいやさのかくたぐへいなるまらる人ハ百も生
 の松原よ子孫のまえとて一ま此修りの處の宿り小令浪
 とりくもさうのあきかなるをまを人辨へさぬ人を却て
 さよきとやさけし深長の意味玄々妙々是洋六う玄
 つ俳諧の困がりしあつて人々もやとけきあつて
 ありさうの却てさうとま小千萬の腸を碎てさるべき也
 ねがよも上一人より天下の人これごとくして聖人をさむは
 孔子出く何の波ものたむ釈る現して愛の社をあらは

為中ひりり此等の心も何多や〔袋林〕此句を出入候

〔説〕此句は事書と略し出候は事書に依て
手事書と事書と略し出候は事書に依て
浮去る事書と略し出候は事書に依て
此句は事書と略し出候は事書に依て
此句は事書と略し出候は事書に依て

て骸骨の画も骨相觀の詞也〔路通〕丹野の事書
月十日の吟也〔方〕馬俳名ハ丹野の事書
此句は事書と略し出候は事書に依て
此句は事書と略し出候は事書に依て
此句は事書と略し出候は事書に依て

川くわう古版近版也古板ハ七殊勝あるものなり馬も是
るひつきく画けり候は事書に依て
阿そ十とせ却て江戸をさるる也

〔解〕云客舎并州已十霜帰心日夜憶歳陽無端更渡桑乾
水却望并州是故郷〔袋林〕此句を出入候

〔説〕此詩の心よ思ひ候は事書に依て
此詩を出入候は事書に依て
此詩を出入候は事書に依て
此詩を出入候は事書に依て
此詩を出入候は事書に依て

○巻序四

ど東武の深川小住して。まきより諸國へ行御せられた。バ
江戸もかたけはひあひも。今よおてハ却て江戸と云へて
なごも思ひもく。無端アジキナキ飄泊雲々の名ありとの感偶即興
也。詩の心も。月々の古の感陽多し。并州の十年遷り几
今もこ并州を驚いて。他へ入らうとも。時ハ并州とも却て
古郷と云へり。是るも。無端アジキナキ世のりうと云へ

よろしくとこけりて 意 けりや 女郎歌

解 云續古今集何れも成志のよれ世のよれ人へと云へるまじき
けりうとこけりて **袋林** 此句と出さぬ

ハ

説 川舟。うらり。海舟。いづれも古舟をり合はば。を
解 色せんと。花も。赤の海舟。うらり。蘇白と。かき。く。ふ。必
古舟と。ば。ま。んと。の。念。も。う。ら。り。折。ふ。ぬ。ま。ぬ。ふ。ま。ぬ。自
然。の。叶。や。も。ら。り。も。ぬ。舟。も。ぬ。舟。も。ぬ。古。舟。と。云。へ。り。も。
解。し。も。ま。い。洞。こ。一。句。の。粉。青。の。新。也。ま。ら。深。く。可。あ。り。し。○
此。句。ハ。初。め。う。ら。り。の。又。ふ。な。り。形。容。粉。青。也。こ。の。草。の。た。ら。の。ふ
て。花。ハ。あ。り。し。ぬ。も。ま。い。舟。も。ぬ。舟。の。瘦。く。も。が。と。ま。い。は。ま。ぬ。雲
ぬ。初。め。う。ら。り。の。葉。は。く。せ。ら。り。も。ま。い。や。俳。諧。ふ。ら。り。人
ハ。一。本。一。葉。と。も。ま。い。ふ。え。と。ま。い。と。あ。り。ぬ。ふ。ら。り。の。深
ま。い。舟。の。ま。い。ぬ。も。ま。い。は。百。練。あり。○笈日記

收卓部留別四句の月も色もけりて露もくもるるなり。○句
選よはよりくもるけりて露もくもるるなり。よはれくもたよ
きもほめし。是又こけりて露もくもるるなり。○句意解
善きもほめし。好むるもけりて露もくもるるなり。今ハさほく向上の人
かゝる見よせせり。彼の誇りもどつても。よはれ子の説々
ありて。句意とどげん善きもくもるるなり。さほくも同く風流あり。言
あり七十節をあらわす。いづれも。書めし極めし極めし。○
癖言成るなり。

林一買しては別かう持たえぬ

袋云是世人に住吉の市よし林を賣て世渡りと計るる也哉
も昔小へきて林を買まらる月れ面白きことごとく林買ては
時のふふとふぢり二入月とるるもふぢりごとく林買ては昔り
氣自るる風雅ありぢりて風雅の風情推て計るなり。○解云
莊子斗斛成而天下人始爭是事にかゝる林買ては物とるる
る也と人隠士のふふのぢりももかゝる所を却ては遠く
句情もひるなり。○林此句をとりて

説袋注一向の妄注。さるふたりとる。翁のさる。何とて。世は氣
風雅氣と。やれりあらんや。何りては翁小あり。世滂靡
の僧よのなると也。九倍のさより。説とまるとも。さる。

不埒也。解 當ぬまうり。莊子濠の然。○去来抄曰此句如何
 去来曰ふあかりとらふ中の七文字えうう一發句ハ此文不
 ぞ人の身よあそくする人ハ外と云物ハ亦帯の乃具ありと
 此外買て後ハ鍋もやうく桶をほく世のも此語者此語
 よりあそくまを鑑よハやうか也と云云○住吉名勝志云
 摂津國住吉太神宮毎年九月十三日寢具の市とて大社奉
 且社勢社司大祿且跡くはして神供之商人外物とて
 あそくまを賣吉兆ありとて諸人買て歸ふと云此句
 寢具の市とて此吟也。元禄七年の吟也。

表虫菴

今宵たきよし路の月を十六里

林 云新古今源三位於彼こころいきりしす、吹風と御あがて
 けいけいの月を誰とてしけあよらるや、二千里の外と十六
 里ふあそくし神の嶽のま程とけ歩の款向あや此あのかち
 けいけいの月を誰とてしけあよらるや、二千里の外と十六
 里ふあそくし神の嶽のま程とけ歩の款向あや此あのかち
 一編の静あそくあそくあそくあそくあそくあそくあそくあそく
 の説也榮句もそふりうつや深意可尋り也後人の心あそく

初めの頃いんや **林** 馬酔木の事。此句は月あけくど。本僅
 とりうらぐらうとん也。あこ下笑也。又川前も何やまら
 説 堀川院御時百首も後ねお点。そりつもけたまふ。横神
 のとりの約つく。い。きよあせも。又貞徳の肝要抄の白
 玉田横野へ奥州の名所し。何り。然川にも玉田横野へ備中
 國也。高倉院御時大掌會。備中國の事。新拾遺集。賀部
 小抄り。玉田横野ハ和泉國あ。新拾遺集。新よ。あ。奥州
 とりうらぐらう。い。け。奥州の名。何のよう。八雲傳抄。あ
 き。い。た。て。り。あ。い。○あせいハ。誤也。あ。も。也。
 万葉よ。あ。又。中。の。字。も。途。中。と。あ。く。り。あ。の。也。馬

碎正。こ。不。極。の。の。め。支。語。也。○。有。是。さ。う。句。選。お。も。う。り。と
 五羊素問。善抄。此句抄。小。く。ら。と。何。り。何。事。も。遠。く。つ。ふ
 一。と。あ。い。ふ。小。許。六。う。集。よ。り。と。ま。元。下。隨。ら。つ。り。ぬ。れ
 即。也。伊。勢。古。雅。談。小。ハ。り。と。い。ふ。亦。素。遠。い。あり。翁。の。自。筆。乃
 經。冊。よ。り。と。ま。泡。と。も。一。と。い。う。り。格。ど。う。に。た。り。ハ。て。り。り。の
 假。名。少。て。名。を。て。り。り。と。い。ふ。也。も。小。と。遠。い。ハ。何。り。と。い。ふ。これ
 ぐ。も。り。り。と。い。ふ。一。と。い。ふ。に。ま。跡。も。り。り。と。い。ふ。一。と。い。ふ。り。り。と
 一。と。い。ふ。也。一。と。い。ふ。の。と。い。ふ。り。り。と。い。ふ。面。白。の。り。り。一。と。い。ふ。れ。き。
 と。い。ふ。の。也。○。句。意。ハ。人。ハ。居。而。よ。り。と。い。ふ。よ。り。り。と。い。ふ。あ。れ。世。の。諺
 小。あ。ら。れ。ハ。あ。ら。と。い。ふ。り。り。人。と。い。ふ。く。世。の。事。と。い。ふ。り。り。と。い。ふ。

とさしうしゝものるゝ此句はかいてハ超極大祕訣なり。如く人
決してあし其解と志るかよの人をんた。翁の言いつまは
掌中子握る念一。知止の道其歩の所と志る。がわもん
だも志のほど。美濃の五竹後五筑坊も此句意おとらく天下小
と改む初らんかーや。中よりとあや。けりまびーら。○又或説よびり
翁混本寺の佛頂和尚の才子と論し時おくごんたけかみ。
勢まありし。ふ佛頂はるごごく。俳諧と判ししれ。綺語
怪詞何の益ありや。と。毎度叱るま。ふ。或時近里よ時齋
なりて。佛頂翁とともまひりし。ふ。な。くも亦俳諧のことと。
ま。ん。お。り。よ。翁。の。い。ろ。く。俳。諧。の。こ。今。日。の。中。目。前。の。り。

うてはと。中。か。り。ふ。ま。う。ば。そ。ろ。ふ。あ。る。本。権。よ。て。一。句。せ
ふとありし時ら吟也と。を。め。ふ。佛。頂。は。る。く。考。て。日。善。哉
々々俳諧の底。深きありのよこそと。殊に感せしきく。
の。い。ろ。く。俳。諧。の。こ。今。日。の。中。目。前。の。り。
と。ま。ん。お。り。よ。翁。の。い。ろ。く。俳。諧。の。こ。今。日。の。中。目。前。の。り。
上。吟。と。題。を。る。よ。し。佛。頂。と。同。乃。ハ。ま。は。し。不。審。也。も
し。や。以。頂。の。を。し。し。め。さ。れ。小。せ。一。句。と。ゆ。し。す。く。せ。ん。も。初。
を。う。し。ん。○。お。り。し。池。行。よ。素。堂。序。も。此。及。紀。行。二。三
句。の。秀。逸。の。よ。し。と。ん。ん。り

金昌寺の柳ちりぬ

庭掃くいでむや一門よらる柳

〔袋〕云此句日行の人とふきて寺と出る所の句と云ふは自ら
我をハ括りてこゝちりぬと云ふは自らハこゝ
一と庭と掃くはこゝちりぬと云ふは
日郭林宗每行宿逆旅輒躬自灑掃及曉去後人至見之曰此必郭
有道昨宿處也これらの句を以て句を殊勝也

〔説〕句選の意も、金昌寺の柳ちりぬと云ふは、
ちりぬと云ふは、的のつて推量し、
郭

林宗が。似く似ぬとの也。是亦下流と云ふ。附會せし
や。○奥の細道少云。大聖寺は城外。金昌寺と云ふは、
形加賀の地也。曾良もあな夜此にこもりて。よもどかす。秋風
すやうの山と。殊に一花を隔。千里も隔。我を秋風とす。
衆寮小部と云。何けがの。さす。讀經の夢澄まふ。清板
て食堂よ入。さす。誠前の空へと。公。忽卒。堂下よらる。と
る。僧とも。紙硯をかく。階のり。て。追来。おや。庭中此柳ち
も。庭を。此句。玄極。乃。も。け。通。○東西夜話
云。河。金昌寺と云。先師一夜の宿を。庭掃て。出。や。中
る。其柳。庭掃も。ゆ。かり。と。云。か。事。志。は。る。る。

〔説解〕 養秋の姿といふもけ白奥の細道と考ふる。元禄二年七月十五六日比の吟也。芭蕉は昔の林の何れなり。や秋をたれを湯りぬる。のうらゝと云。七月と九月の遠くあり。途中此吟と題あり也。

玄妙切

春もやまきふとくの小月と梅
あらくと日いつきあも秋乃風

古今抄よ云あよりと此二章と議とくらに三節の万ふ切き亦もア
次或ハ月小あは梅不ありと或ハ夕日の發句おとありす秋風の蒼
白もゆきす毎々看枯れ朗詠と云へし。句外ハ咏嘆の余情とぬ。又
吾句ハ慥も吾句ゆらんよあはれや玄の玄ありて衆妙の切とも
なむ。わと人のすてさふし。芭蕉翁頭陀物語 涼袋 作

芭蕉翁頭陀物語 涼袋 作

ふと翁加賀のむ枝よりとあらしの或夕水句と情ありと秋の山
と立てるをゆきゆきもむ枝非して日此句意ハ今一二里ぬるとい
秋女中らいつしむへ日ハ又早く傾うしとさるに吾翁とておし
夕附日遠山松も紅ぬなるいまもあき峯の夕日といふは山
と云字居るに色て氣多の廣うとぬと云ふ翁うかへてゆきゆき
了とわきよむ枝ありと秋風の風を葉とてりたりやは秋の風
かむ夕の情とそへあらくと日いつきあも入果とぬと云ふ
此のあらしのまよ諸人の案をうらんや。結うら風といふ。聞人を
あらしのまよとて山を吹く。あらしのまよとてあらしのまよ。近
あらしのまよ。此句の解はあらしのまよとてあらしのまよとてあらしのまよ

まほの初めをいりうは。句さのめけをさり

よーおめえ

よめえおめえ我ふさうせよ坊の裏

袋 云吉神の奥或坊より一巻を借りては向れぬ我も世にゆくは神を
 たぬ人よ参るるかー何とも取捨するさ庵へも入りし書もつた
 幸徳寺を参りておぼくは白也林 云河をゆくは坊より一何りみよ
 一神の山の杖目さうおぼくはついで参りりりり参るよは此の何
 在州おぼく思ひさうおぼくは句は送る一二句をたつらう誂少子の自
 漢してあめ句は句はついで参りりりり参るよは夜参りておぼくは

礎よりいへー鐘の打つてはもまといへぬー燈の消會の夜は
 言活のつらさいよて原ささたけりえぬゆきけりし旅寂し所
 もよーおの暮るゆきせめく夜参りておぼくは参りては旅寂し所
 と也只流ハりのうく幸是くぬと情もふく一旅後のおぼく
 よーおめえ 川分 此寺原葛藤より一石とをたけ下坊とい伊勢
 の町坊より一石とをたけ下坊とい伊勢の入口おぼくは並座して旅寂し所
 家居也挽お細工と高して箱根の湯にお付似たり

説 袋 坊と僧坊と魚へおぼくはよーの奥かーさう。僧坊よ書り
 らうや。一向安語不可用也。句選と送のさゆも。よーおめえとば
 うらま。都て袋注よおぼくは所兵。細さるハ。自己くおぼくはておのれ

何れぞ候と初葉よ侍ふ。解 ぬくふ記さしるるも空也の別名
の何れぞ候ハ此句よハ奇くさき事。○ 決らく思ふよけ句謂ま
る。此志のたをさしる新憶ふなすてハ叶ひぬるも或
空也の舊地。又ハ隱者僧徒の居室かど初屋か。何れぞ由緒
の何れぞ候と云ふ。さる侍り候。初葉もか。措哉不詳

○ この葉れ戸の抽りびく風信。たれがら何れぞ候のい
し。の位始め候。世の人もゆし。さやいんた。よいつく
めをいひ。葉の戸れ月ハ何れぞ候。そのまありと云ひ。雲
とつみ。風信進。さる。候家の明哲と候。○ 如
小巻蕉小文庫と云へり。た。ま。詞書。詞。文。詞。云。云。

葉の戸と云ふ。い。や。き。な。の。い。も。を。よ。の。い。き。物。を。あ。り
く。さ。け。の。い。ま。よ。候。ま。候。と。云。ひ。く。西。の。の。よ。う。せ。ん。ま。よ。
山家集。く。の。せ。い。ら。い。な。る。位。始。め。や。ま。え。か。の。坊。を。り。
ま。い。も。と。何。れ。ま。い。は。翁。も。西。上。人。の。平。よ。う。り。て。な。り。く。風
と。吹。せ。ま。さ。ら。る。子。顯。表。り。解 ぬ。空。也。何。れ。ぞ。坊。り。ハ。山
位。始。め。や。ま。え。か。の。時。代。と。云。ふ。お。遠。ま。り。○ 空。也。上。人。者
圓融院天禄三年九月十三日寂。東山西光寺。八十三歳。又東下
野守常録。圖書曰。空也。世以皆延喜御子。也。中。全。く。清。子。ん
何。れ。ぞ。延。喜。三。年。癸。亥。誕。生。天。祿。三。年。壬。申。七。十。歳。カ。て。入。滅
也。と。云。

○芭蕉四

此の厚き心をもよほすのこぼれ解りて一句の意をけりけり。初学はさうく見ゆる事遠く。老輩の我がふ紡り。増て初学の人能たふい。けりけり都て上古より。詩歌の注抄。ぞもとろん。文をばい。まやふ質朴小正。記を成要とらり。さ。保ふらて古拙をばり。人の耳ふ。あて。その中より。ふ発明。あ。後哲を多くし。也。終夜の潮ふか。て。夜一よ。さ。癖もや。池。とめ。けり。岫士峯小。と。さ。あ。と。た。い。あ。や。け。ん。○又詩歌連俳。いづれの月。いづきのもの。惜ま。け。り。や。又詩歌。と。い。い。で。ん。一。主。涯。尋。り。と。も。そ。ぞ。る。人。此。句。ふ。ま。あ。ぬ。詩。か。も。ま。あ。ら。ん。そ。の。の。こ。は。う。け。い。解。り。景色と文章

小のこころを媚ふゆゑに却てあざやうなり。又終夜と云。初より。曉まで。池とめ。けり。月と泳め。あ。う。せ。い。あ。を。あ。ら。ん。ず。い。う。小。月。と。惜。む。終。夜。あ。ら。じ。人。と。そ。も。利。那。の。際。も。あ。ら。ん。ハ。狂氣人なり。あ。い。あ。い。も。ま。り。や。

泳むこころをけりけり首の青 宗因

名月やえつめても姑ぬおひよき 湖春

是人情の泳み風雅なりてかざりけり。天然成り。ゆき也。

○徂徠譯文筌蹄曰ヨモスカラ終夜ヨ通宵ヨ宵ヨリ曉迄ニ至ルヲ云歴史醫書ナトニハ誠ニ夜通シノ心也文章詩歌ノ上ニテハ切ニ思ヒツヨク夜ヲ更ス事ヲ見センタメニヨモスカラト云也と云

予らあまかへし 妄説よりしきと
古人の海のたしきとるるべし 或人け句ハ何ハのちめてせし
 まりしとけりし下も連字をよむ古詩古歌よりしめてしき
 ことまかやけし我俳諧ハ京如のちめくちしす編めし文詩を
 のちよけしと云ハるる人の評判なること是非あくを過よし
 此ハ古詩古歌と云ハるし此祭句ハ海ぬと云ハる古人の指とぬふ
 ことく不自中ぬことありて有ム
予らあまかへし 妄説よりしきと
西のちとけりし 序も亦非也 先師乃
 在ハ月のしと云ハるは海ぬと云ハるかぬと云ハる
 体て面白くももも何の古も海らまも入師しき句也
是ことと云ハるハ正統の流と云ハる也
○ 上 又此地小何来と云
 學者のゆりしと云おくのよりしき古人の格式小何来と云

予らあまかへし 妄説よりしきと
古人の海のたしきとるるべし 或人け句ハ何ハのちめてせし
 まりしとけりし下も連字をよむ古詩古歌よりしめてしき
 ことまかやけし我俳諧ハ京如のちめくちしす編めし文詩を
 のちよけしと云ハるる人の評判なること是非あくを過よし
 此ハ古詩古歌と云ハるし此祭句ハ海ぬと云ハる古人の指とぬふ
 ことく不自中ぬことありて有ム
予らあまかへし 妄説よりしきと
西のちとけりし 序も亦非也 先師乃
 在ハ月のしと云ハるは海ぬと云ハるかぬと云ハる
 体て面白くももも何の古も海らまも入師しき句也
是ことと云ハるハ正統の流と云ハる也
○ 上 又此地小何来と云
 學者のゆりしと云おくのよりしき古人の格式小何来と云

○再考もるに世説曰司馬太傅齋中夜坐于時天月明淨都無
 纖翳太傅歎以爲佳謝景重在坐答曰意謂乃不如微雲點

下畧是らも初也
中何れはたしきと

用ふ一不堪なるものあり。解川言二昔益益此友首初
 ても此句意はすゆも也。作一也。あおも云。藤の句々
 毎小古ををなられ。あもゆ。是ら途中の感偶即奥より
 詩歌中いさう念なきころ也。た。太平記。并平家物語
 等と。評判書。或代其師小己居合きての。或ならん。た。殺百
 卒の後。春清乃御代よ遊。て。乱中の人事と雅。て。無
 益よ片腹痛。い。い。も爪。て。蚤と殺。繭。て。蠅。と
 る。り。も。た。や。し。し。志。う。色。成。煙。り。て。ぬ。る。り。も。多。かり。し。た。れ
 ば東西夜活の文脈と。前章小川出せ。もか。附會の古。さ。し
 と。さ。さ。と。解。きた。り。也。○五文字四品之説。猿と交て人。白選。れ。も
 不。如。此。

猿ときて は林に池 西り此 猿とすて猿とす人 本朝文鑑并 句解如此記 ぬ猿と交て人とい
 古風の詞。初念い。か。も。出。一。な。る。る。治。治。の。あ。す。耳。小。た。て。む。
 後。よ。再。索。り。て。西。せ。し。と。ん。え。り。猿。と。きて。と。い。解。ふ。と。一。如。く
 句意り。の。す。猿。と。す。て。も。古。風。の。詞。し。猿。と。す。人。と。い。す。ふ。か。り。て。
 一。句。意。も。す。え。や。ら。し。吏。登。り。神。日。記。の。え。え。可。無。也。 吏登一とせ 嵐雪と改む
 一。此。の。え。え。と。し。嵐。雪。神。日。記。と。也。
 一。と。し。て。又。吏。登。光。樹。と。也。
 一。考。多。小。猿。と。きて。い。全。く。誤。也。猿。と
 きて。て。也。ら。ら。と。下。の。ま。の。ま。と。兼。忽。人。傳。寫。よ。ら。や。ま。り。為。一。て。
 猿。と。きて。と。傳。て。て。え。ん。り。古。ま。す。り。傳。言。の。誤。は。い。ん。も。一。か。く。
 是非もなく。偽。後。世。小。孫。と。誤。く。一。僻。言。い。い。つ。も。正。を。為。す。
 一。の。ま。い。ち。の。こ。う。ら。が。て。年。月。終。り。終。り。た。と。い。ふ。は。し。

きりぎりすもよろぎは是非多く山に随ひて疑ひと關事漢ふ
之此類多し詩句はなつかしの也。塔て俳諧なるとや。たとい古
嵐をとりこむとも定めざる可なり。然るに捨てて芭蕉とも云
可也。此句も亦ふ云々。志ひていふよ。侍の句也。只句意と
の。さういふは。智をうけよ。や。○巴峽の曉猿ハ他國なり。い
聞て叶い。日本の山峯。近ハ王子遠。九月の月。清比。をむら
てゆく。極りて鳥。悲しく表なる物とや。猿とすて人。悲
し人。此猿の泣きを。とあはれま。んや。是は。悲し。か。け。れ。不。可。計
なる。親。い。ふ。ふ。や。悪。し。と。い。ハ。猿。ま。げ。後。ま。き。世。と。親。志。せ
量。少。し。て。句。中。ハ。所。無。り。杜。風。と。あ。ま。き。む。と。偏。り。し。事

の入が。い。も。名人の。事。也。か。け。不。可。感。仰。と。い。き。事。也。猿。と。は
よく。評。せん。ハ。猿。の。句。小。後。屋。一。是。ハ。捨。子。乃。句。も。猿。う。け。合
お。と。い。ふ。也。

右十有六章

○ 卷 第 四 早



